

# 架空送電線の大容量化

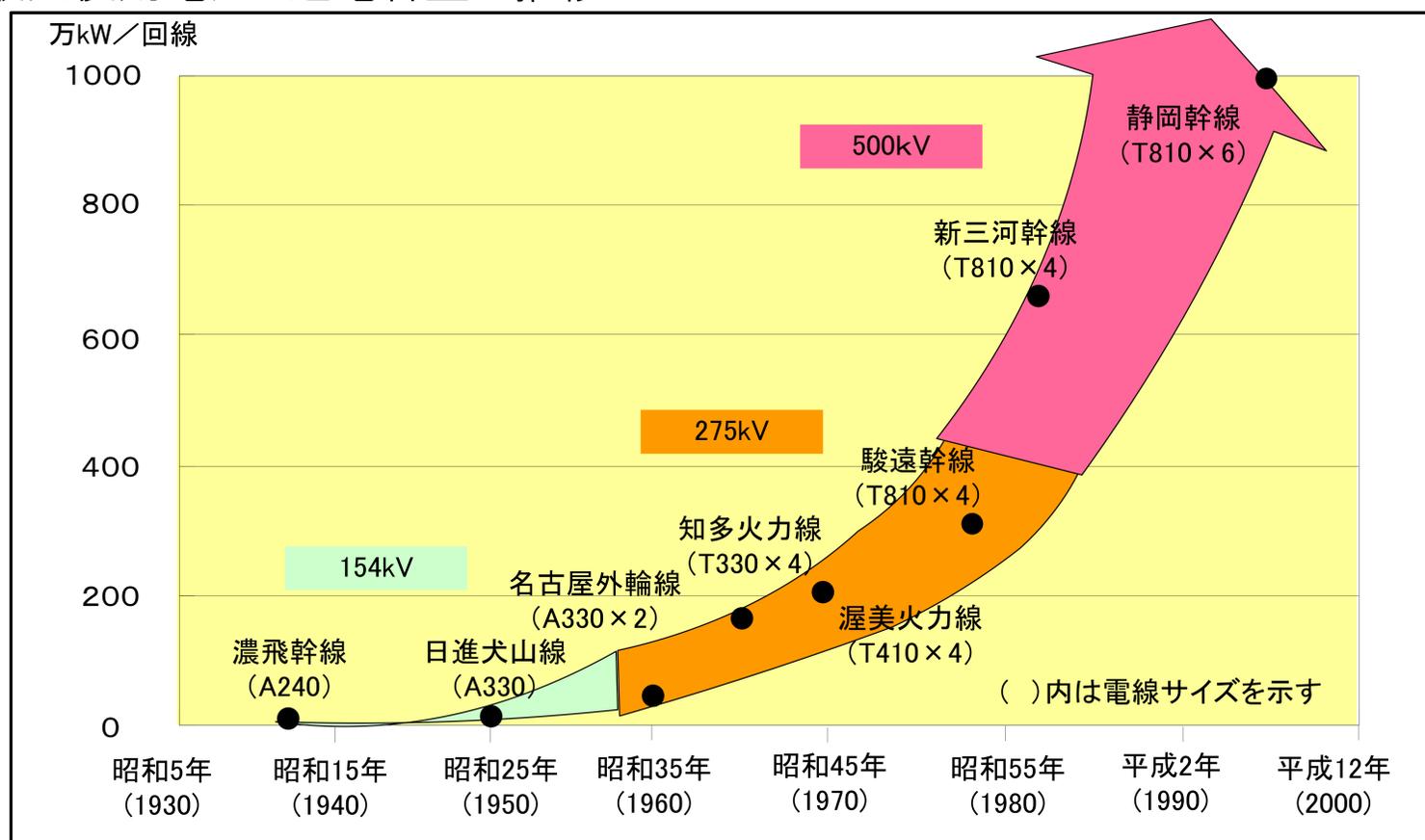
## 送電線の技術変遷

社会経済の発展による電力需要の増大から、送電線においても、高電圧・大容量化の技術開発が行われてきた。

当社の設立当時は、送電電圧33・77kVが中心であったが154・275・500kVへと高電圧化された。

大容量の電気を安定供給するために導体方式も様々なものが開発されてきた。当社では、昭和33年77kV新名古屋火力線において2導体が採用され、その後の名古屋方面に送電する275kV名古屋外輪線など275kV送電線の主流を占めた。昭和40年完工の275kV知多火力線では4導体へと大容量化された。また、さらなる長距離・大容量化のため500kV第二基幹系統では大束径の6導体が採用された。平成10年に建設された500kV越美幹線は、低インダクタンス化による送電ロス低減を目的に、従来の導体間隔0.8mをさらに拡張した超大束径6導体方式（導体間隔1.2m）が全国に先駆けて開発・採用された。

最大使用電圧と送電容量の推移



500kV愛岐幹線(T810×6導体)



500kV越美幹線スパーサ(導体間隔1.2m)